

# ヘーゲルにおける弁証法と生物学の諸問題 (上)

—『精神現象学』の「自然の観察」に対する解釈の試み—

渡 辺 祐 邦

(昭和42年10月31日受理)

## Dialectic and biology in the Hegels Philosophy. A study of "Phenomenology of Mind,,

by Yuho WATANABE

In his "Phenomenology of Mind,, Hegel discussed some problems of the dialectic concerning the development in the biological science of his era. In this discussion titled "Observation of Nature" we can find the original forms of his dialectic adapted to the scientific cognition of the organic nature, Linnean concept of species and their variations that led to the revolutions in the biology in advance of the Darwin's time.

### 目 次

1. 「自然の観察」におけるヘーゲルの意図と方法
2. 「自然の観察」における生物学の認識論的諸問題の分析
  - a. 記述的認識の問題
  - b. 人為分類と固定的な種概念 (リンネ)
  - c. 静止的体系の崩壊と種の変異性問題

### 1. 緒 言

本稿の目的は『精神現象学』においてヘーゲルが「自然の観察」と題したテキストを、彼の時代の自然科学の具体的な諸問題に照らして解明し、ヘーゲルにおける弁証法の発生と18世紀における自然科学の革命的発展との間の連関を考察することにある。

ルカーチはかつて『若きヘーゲル』の序文においてこの連関をヘーゲル哲学の研究における今日もなお暗い半面と呼んだ。しかしわれわれは、「自然の観察」におけるヘーゲルの問題を自然科学の歴史的発展との連関において考察することによって、その叙述の中にこの連関を明らかにする二三の重要な素材を見出すことが出来るのである。特にわれわれはこの叙述によって生物学の問題についてヘーゲルがどの様に弁証法の問題を追求したかを明瞭に見ることが出来ると云わねばならない。

## 1. 「自然の観察」におけるヘーゲルの意図と方法

ヘーゲルが「自然の観察」において近代自然科学における認識の歴史的発展を論じていることは最早異論のないところである。イポリットは彼の『精神現象学』への注釈書において、この箇所が「ルネッサンスから彼の時代までの科学の発展に対応する<sup>1)</sup>」と述べている。特に彼があげている名はリンネ、ジュッシュー、キールマイヤー、シェリングなどである。フィッシャーもこの箇所ではヘーゲルが「それと名指すことなしに」ベーコンとシェリングに言及していると考えている<sup>2)</sup>。更にローゼンクランツが1806年の実在哲学講義について伝えている次の言葉も重要な指標となるであろう。「ここでは彼は自然の叙述に現象学を組み入れた。……彼は私念に偶然的存在を、悟性に普遍的自然法則を、理性に生命、有機的なものを対比させた。それは経験的、かつ抽象的形而上学的自然科学が、いつもその中を動いているカテゴリーの弁証法的批判であった<sup>3)</sup>。」

それではこの全体的な歴史的過程との対応において、テキストの個々の形象やその分節はどのような意味をもっているだろうか？

われわれはこの点を考察するに当って、まずラッソンが彼の編集にもとづく『精神現象学』の出版に際して与えた、全体にわたる細かな分節を念頭から除外しなければならない。それらはヘーゲルの意図とは全く関係のないものであって、むしろそれを見失わせるものである。

ラッソンは「自然の観察」の部分にも次の様な三分法による区分を与えた。

1. 自然物の観察 Betrachtung der Naturdinge
2. 有機的なものの観察 Betrachtung des Organischen
3. 有機的全体としての自然の観察 Betrachtung der Natur als eines organischen Ganzen

これらの三部分は彼に従うと更に厳密な三分法にしたがって、各々三つの分枝に分かれ、その各々が更に三部分から構成される<sup>4)</sup>。

けれども「自然の観察」のテキストは本来いかなる区分もないひと続きの運動を表すものであって、ただ目次においてこの運動が経過する次の様な諸形態が示されているにすぎない。

記述一般 Beschreiben überhaupt

形 質 Merkmale\*

1) J. Hyppolite: Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel (1946. Paris) p. 35, p. 223 f.

2) Kuno Fischer: Hegels Leben, Werke und Lehre. 1. S. 343. 346.

3) Karl Rosenkranz. Hegels Leben. S. 214.

4) vgl. Phänomenologie des Geistes hrg. von J. Hoffmeister S. 565. ラッソンは第三版において取り除いた。しかし、イポリットの仏訳はこの区分を踏襲している。イポリットがこの区分を踏襲することによって、どのような誤りを犯すことになったかについては、後にふれる。

\* Merkmale は、わが国ではふつう「徴表」と訳されている様である。しかし、これは誤りで、ここでは分類学上の用語として「形質」と訳すべきだと思われる。Merkmale とは動植物を分類するさいの識別手段となる特徴のことで、英語では characters フランス語では、イポリットが正しく訳した様に signés caractéristiques (いずれも複数) と呼ばれるものである。

法 則 Gesetze.

有機的なものの観察 Betrachtung des Organischen

α. その無機的なものへの関係 Beziehung desselben auf das Unorganische

β. 目的論 Teleologie

γ. 内と外 Inneres und Äußeres

ここでは、なるほど「有機的なものの観察」のみは三分法に従っている様にみえるが、全体は必ずしもそうではなく、ラッソンが考えた「自然物の観察」及び「有機的全体としての自然の観察」と云う項はない。このことはラッソンの区分によると、この箇所が宛も彼の自然哲学に似た体系的原理に従っているかの様な印象を考えるのに対して、体系とは別な発展法則に従っていることを示している。

この発展法則を理解するために、われわれは自然科学の様々な分野がどの様な過程を経て今日の段階に達したかを考察しなければならない。マルクスは『資本論』において、大工業の発展における伝達装置の複雑化が、摩擦の法則の科学的研究を促進したと述べているが<sup>5)</sup>、それは様々な社会的、技術的要求が自然科学の新しい分野を生むインパクトとなり、あるいはその発展を加速することがあると云う限りにおいて正しい。けれども科学的認識の発展には、これらの要因とは独立な法則性があり、それを無視してはいかなる認識の発展もありえない、と云うことにここで注目しなければならない\*。

自然科学の歴史的発展過程を研究することによって、その発展を制約するこの様な法則の存在に気づきさえすれば、われわれは「自然の観察」において、ヘーゲルが叙述しようとしたものが何であったかを容易に理解することが出来る。

彼がこの箇所で論じようとしたものは、自然科学的認識が過去の歴史的発展過程を通じて無意識の内に行なってきた弁証法的思惟への媒介的運動であって、この運動の力学が具体的な歴史的象を通じて現われる仕方なのである。

したがって「自然の観察」におけるヘーゲルの真の問題をとらえるためには、単にテキストに現われる個々の形象や謎の様なアレゴリーを歴史的な具体的形象に結びつけるだけでは充分ではない。われわれは更にそれらがもつ意味と連関とをその方法論的必然性において把握しなければならない。

ヘーゲルは『精神現象学』の序文においてその方法論的精神を次の様に述べている。

「個人の実体と世界精神は忍耐をもってこれらの諸形式を長い時間かかって通過し、世界史の巨大な労働をなしとげねばならなかったのだから、個人も事実上はそう易々とは自分の実体を把握することが出来ない。だが同時に個人の労力は世界史に比べれば僅かなものである。

5) Karl Marx: Das Kapital. hrsg. von F. Engels. Buch I. S. 394.

\* この問題には、これ以上詳しく立ち入らないが、ヘーゲルのテキストを理解するためには、自然科学を歴史的な生成において、とらえる必要があることをつけ加えておく。認識の発展法則については、後述の井尻氏の著作の中に明確な観念が与えられている。

なぜならこの仕事は即自的にはもう完成しており、形成作用は……すでにその省略形、簡単な思惟規定になり下っているのだから<sup>6)</sup>。」

この方法論的観点を理解すれば、『精神現象学』を特徴づける、さながら暗号書の様な難解さも、秘教的な隠語の様にみえるアレゴリーも決して恣意的に用いられているのではなく、高い方法論的意味において使用されていることが了解される。

『精神現象学』においてはすべての歴史的過程や歴史的象は「省略符」として扱われる。なぜならばその過程はすでに完了しているからである。だがこのことによって『精神現象学』はあらゆる歴史的象をそれが現実の歴史において属している具体的な時間と外面性から引きはなし、それらが同一の意識形態あるいは思惟のパターンに属するかぎりにおいて比較することを可能にする。そしてそれらを具体的な外面性からなるべく遠ざけ、思惟の必然的發展において叙述するために簡単な名称、たとえば「美しい魂」とか「不幸な意識」と云った象の中に圧縮するのである。

自然科学の歴史においても同じ方法を適用することが可能である。現にわれわれは自然科学史の研究において、年代や発展期間の長さの非常に異なる二つ以上の分野の出来ごとを比較して、そこに研究方法や思考形式の上で共通のパターンを見出すことがしばしばある。たとえば化学における元素の分類や命名に関するラボワジエの仕事は植物学におけるリンネの業績に比較することが出来る。それは両者が認識の方法の上で一定のパターンに属していると言う意味である。この点で自然科学の歴史についても、ヘーゲルが『精神現象学』で行なった「非年代化」の方法は非常に有効な働きをもっている。

ところで自然科学の場合にはどの分野も絶対的完成などと云うことはありえないから、独立に、別々な速度で発展する各分野の中で相対的に完成した科学の分野がひとつの尺度となる。ヘーゲルはこの問題を比較発生学の問題に関して、マルクスに先立って次の様に述べている。——「より低い段階を理解するためには、ひとは発達した有機体を認識しなければならない<sup>7)</sup>。」

ここでヘーゲルは彼の時代の自然科学の諸分野の中でどの分野を最も発達した分野と考えたかが重要な問題となる。

ヘーゲルは、ニュートン力学をあらゆる自然科学の範型とみなした十八世紀の思想的伝統に反して、力学を悟性の段階においた\*。更に化学と電磁気学は彼の時代に急速な発展をなしたとげたとは云うものの、まだようやく素材を集めて、分類したり、記述する段階を、出なかつた。したがって認識の原型ないし、尺度として、ヘーゲルが考えたものは、生物学以外になかつ

6) Phänomenologie hrg. von J. Hoffmeister. S. 27-8.

7) Hegels Sämtliche Werke. hrg v. H. Glockner Bd. 9, S. 6-1.

\* この点について先に引用したローゼンクランツの記述を参照せよ。何故彼が力学をその様に考えたかについては、色々の問題が考えられるが主な点については拙稿『惑星軌道論とヘーゲルにおける古典力学の問題』(北大哲学会編「哲学」1号, 1964年)を参照されたい。

たと云える。

ヘーゲルがこの時期に生物学をヨーロッパの自然科学の中で最も進歩した科学とみなしたことは全く正当な理由をもっている。と云うのは、この時代には生物学は、化学や電磁気学がやっとさしかかった段階、つまり元素を発見したり、新しい現象を記述したりする段階を通り過ぎて、ようやくもっと高度な認識に達しつつあったからである。

彼は後になっても、生物学(とくに動物学)が、他の諸科学に抜きんでて高い認識の段階にあると云う考えを少しも変えていない。

彼は『エンチクロペディ』においてこうのべている。「自然科学一般においてと同じ様に動物学においても、最初は主観的な認識のために「綱」や「目」の确实で簡単な形質(Merkmale)を見付けると云うことがより以上問題だった。だがいわゆる人為体系〔人為分類〕と云うこの目的が、動物の認識においては余りかえりみられなくなったのち、ようやく生物の体制そのものの客観的本性に向うものと大きな眺望が開けた。近代の経験的諸科学の中で、観察の量においてだけでなく(この点ではどの科学もひけをとらないから)、その素材を概念に向って加工したと云う側面において、動物学が(比較解剖学を補助科学として)なしとげた拡大よりも、大きな拡大はなかった<sup>8)</sup>。」

この記述の中でヘーゲルは認識の二つの段階をはっきりと区別している。第一の段階は、「主観的認識」のための「确实で、簡単な形質」にもとづく「人為的体系」の形成、即ち、分類学の完成であり第二の段階は比較解剖学による生物の体制の「客観的本性」の認識である。

だがこの新しい質をもった認識の段階はどの様にして生れて来たのだろうか?

『精神現象学』におけるヘーゲルの問題は端的に云って、世界史の中で「即自的に」行なわれたこの自然認識の変革の法則を、「対自的」な形式にうつしかえ、このあらゆる時間から自由な発展運動を通じて個人の思惟を弁証法へと媒介することにあつたと云ってよい。

ところで、この二つの発展過程、つまり外面的な偶然性と時間性の中で即自的に生じた過程と、意識の次元に内面化され、必然性だけに従って叙述される対自的な過程との間に、ひとつの平行関係があることを理解すれば、われわれは「自然の観察」において意識が通過する様々な形象と分節の意味を理解することは決して困難ではない。それらは勿論アレゴリーとして、時間的制約をこえた、ひろい意味をもってはいる。しかし、根本的な生起は云うまでもなく、地理的発見以後のヨーロッパにおける生物学的認識の発生と発展である。それゆえ、われわれは前述の諸形象をこの観点にしたがって、次の様な「原現象」に対応させることが可能である。

「記述」——十七世紀及び十八世紀の自然研究者、採家集と旅行家による「博物学」の段階。

8) § 368 Anmerkung. ibid S. 675. 更に同じ観点を彼は『美学』においても、詳細に述べている。(vgl. Ästhetik hrg. von G. Lukács S. 152 f.), これらの彼の著作全体における(たとえば宗教哲学講義における)生物学の問題についての論議は今後も重要な研究の対象となるものである。

「形質」——この言葉は直ちにリンネを思い出させる。すなわち彼の不連続で固定した「種」の概念にもとづく分類学の段階\*。

「法則」——リンネの静的体系の崩壊とそれとつづく生物学の新しい原理の形成、つまりプロセスとしての生物の認識の段階。

「有機的なものの観察」——生物学的諸法則あるいは生物学的法則と単に称しているものの分析。a. 環境による変異（機械論的進化論）、b. 目的論的法則、c. 内的条件と外的条件の調和的法則、d. シェリングとシュテフェンスの擬科学的法則など。

ところでこれらの諸段階の内でも注目すべきものはリンネの種に関するヘーゲルの考察である。なぜならばヘーゲルはそこでこの生物の最も基本的なカテゴリーである種の問題の論理的本性及び記述生物学の認識論的構造の中に深く立ち入って、自然科学的認識の発展における根本的に哲学的な問題を適確に把握し、論じているからである。われわれはその箇所の中に、ダーウィンの進化論に至る生物学的認識の過渡期における生物学のカテゴリーの最も根本的な論議を見出すことが出来ると同時に、ヘーゲル哲学の方法、すなわち弁証法の彼の時代の自然科学の諸成果に対する本質的な関係を指示する様々な連関も見出すことが出来る。そして、そこからわれわれは彼の弁証法が、死んだ、固定的な標本としての生物の研究（分類と記述）から、生きたプロセスとしての生物の認識へと、その研究の中心が移っていった近代生物学の最も根本的な革命に即応し、その要請にもとづいて生れた方法であったことを正しく認識することが出来るのである\*\*。

## 2. 「自然の観察」における生物学の認識論的問題の分析

### a. 記述的認識の問題

ヘーゲルは「自然の観察」において自然科学的認識の根本的な発展をその各々の段階における認識の原理と対象の本性との不適合から導き出している。

勿論ここでは認識者つまり「観察する理性」はこの不適合さに最初から気付いているわけではない。ましてその対象の本性が何であるかを知っている等のものでもない。しかしそれに関らず認識があるところまで進むと、観察者はいや応なしに自分が適用している方法と原理の不適合性を思い知らさせる。この様にして対象の本性はこの様な意識の側から対象への実践的関り\*\*\*（観察）を通して意識の思いこみや勝手な原理を変えることを迫る。それゆえに認

\* イポリットはこの点については正しく「記述と分類の静的な宇宙」と呼んでいる。(op. cit. p. 230), ヨーロッパ生物学の発展の諸段階について、総括的には、徳田御稔「進化学入門」(紀伊国屋新書) 23頁を参照されたい。

\*\* ヘーゲルが自然科学に関して、全く無知だったとか、素人だったと云う従来の見解は、いわれないものである。この点でもイポリットは、ハルトマンのこの様な誤った見解にしたがっている。(op. cit. p. 235) だが正しい連関は、すでにヘーリングとグロックナーによって指摘された通り、彼は同時代の科学の諸成果について、深くかつ広い知識と理解をもってたと云うことなのである。

\*\*\* ヘーゲルは観察が感覚と異なって、能動的な方法であることを主張している。

識の発展とは、この様な思いこみや私念を是正しつつ対象の本性が一段一段と意識に反映してゆく過程に外ならない。

さてヘーゲルはこの箇所において生物学的認識の各発展過程を、生命ある自然と云うその対象の弁証法的構造が生物学者の意識に反映する過程として叙述する。最初の段階は、「記述」である。

記述的認識の段階においては、意識はまだようやく「いっまでも変わらないもの<sup>9)</sup>」(das Sichgleichbleibende)と云う論理的形式をもっているにすぎない。したがってこの形式を対象に適合させ、あるいは感覚の素材をこの中に収容した場合、対象は運動しないでその代りに意識が運動し、この形式においてとらえられる限りでの対象の本性を生物の種の多様性としてとらえることになる。

ここからバナールが「採集家と旅行家と分類家の偉大な世紀」と呼んだ十八世紀の生物学的認識の最も情熱的な拡大が説明される。

「対象は記述されると同時に関心を失ってしまう。ある対象を記述し終ったら、別な対象にとりかからねばならない。そして記述を止めない様にいつも新しい対象を探さねばならない<sup>10)</sup>。」

この様にして記述的認識にとってまず有機的自然の無限な多様性の認識が先じる。そしてこの多様な自然の無限な個別化は更に記述的認識の限界を思い知らせる。

「この休むことを知らない、不安な本能は決して素材がないなどと云ってははいられない。新しい綱を発見することは……幸運な人にしか許されていない。しかし象や柏や金の様にはっきりしたものの境界や、「属」や「種」の限界は様々な段階をへて混沌とした動物と植物、鉱物あるいは力と技術によってはじめて姿を現わす金属や土類の無限の特殊化に移行する。普遍者が規定を失なうこの領域では……観察と記述のための無限の豊庫が開かれる。しかしここで見渡しがたい拡野が開かれるこの境い目に、観察は無限の富を見出す代りに自己の行為の制限を見出したことになる<sup>11)</sup>。」

記述的認識の限界は、認識が静止した普遍者と云う形式しか知らないところから先じる。この段階では種と種の間に移行とか、これらの多様な種が、共通の先祖をもっていると云うことは問題にならない。混乱した構造をもつものは「記述されると云うことさえ要求できない。」そして無限に個別化する運動を止揚する形式として、同様に静止的な原理にもとづく分類学的認識が発生することになる。

ヘーゲルのこの叙述は問題を単純化しているが、初期の生物学、つまり「博物学」の認識論的特質をおおむね正しくとらえていると云ってよかろう。

9) Phänomenologie S. 105.

10) ibid. S. 186.

11) ibid. S. 186.

## b. 人為分類と固定的な種概念 (リンネ)

さて記述的認識においてはその方法の不適合さはまだ物の中にかくされて、自然の多様性と云う形でしか現われて来なかった。ところが分類学の思想的態度において、この矛盾は最も鋭い形式において姿を現わすことになる。

ヘーゲルはまずリンネの分類学の認識論的構造を次の様に考察する。

「(分類学的記述にとっては) それによって様々の物が認識〔識別〕される性質〔形質〕の方が他の残りの性質よりも重要である。……この本質的なものと非本質的なものの区別において感覚的分散の中から概念が現われてくる。そして認識はこう宣言する。認識にとっては物と同様に自分自身が少なくとも同じ位本質的に問題なのだ<sup>12)</sup>。」

リンネの分類は動植物の様々な形質の中から、特定のものをえらんで、それによって無数の個体を少数の個体群に区分すると云う方法である。この場合どの様な形質をえらんでもいい訳ではないので、識別の目的のためにはなるべく見分けやすく、しかも長い間変化しにくい形質をえらぶ必要がある。ところでヘーゲルによると識別のための形質の選択と云う作業の中にすでに記述的認識の静止的な立場が現われていると云うのである。そしてこのことはリンネがこの様にしてとらえられた「種」を自然存在なりと主張するに及んで、ますますのっぴきならない問題となってゆく。

リンネの方法は今のべた様にあらゆる形質の中から勝手に一つの形質をえらんで、それを「種」を区別する原理とするのだから、それに対する批判は、当時すでにあつた。たとえばビューフォンはその様な形質は認識に役立つだけで、自然の中に種の区別はみとめられないと主張した。

ヘーゲルはこの両者の主張を対比して次の様にのべている。

「一方では形質なるものはただ認識のために役立つだけで、認識はそれによって物を〔人為的に〕区別するにすぎないと云う。しかし他方においては、そこにおいて認識されるものは物の非本質的部分ではなく、物がそれによってみずから存在一般の普遍的連続性から脱け出して、自己を他と区別し、独立に存在するところの部分だと云われる。したがって形質は認識に対して本質的な関係をもつだけでなく、物の本質的な規定性を表現し、人為的体系は自然の体系に適合するばかりか、それだけを表現するのだと云われる。このことは理性の概念から必然的であり、理性の本能が、その体系においても、対象がそれらの形質の中に本質性と対自有をもっていると云った性質をもつ、この統一に達したのである<sup>13)</sup>。」

ここでヘーゲルがリンネによる種の自然存在の主張を理性的な必然性から理解しようとしていることは注目し得る。しかしそれは何もリンネがえらんだ形質が科学的に正しい意味をもっていたと云うつもりではない。その意味は自然の中の静止的な、はっきりとした区別と

12) *ibid.* S. 186-7.

13) *ibid.* S. 187.



云うリンネの種概念が、理性のこの段階における認識にはどうしても必要であったと云うことにすぎない。

今日では、リンネの固定的な、不連続な種概念はダーウィンの進化論に対立する概念としてあまり高く評価されていない\*。けれどもわれわれはここで、種の不変性の仮説が科学的な観察の結果であったこと、そして古い形而上学の(誤った観察にもとづく)自然発生説や変移説の否定の結果だったことを思い出す必要がある。

ラドルは生物学が種の問題を厳密に取り扱う様になるためには、種を自然存在としてとらえることと「同種のものから同種のものが生れる」と云う命題が実験や観察を通じて確立されることが必要だったとのべている<sup>14)</sup>。ヘーゲルも、これとはまた異なった意味においてであるが、意識が有機的自然のより高い認識と概念に達するために、リンネにおいて不連続な、固定した種の区別が自然そのものの区別として把握される段階が必要だったと考えている。なぜならばリンネによるこの種の自然存在の主張によってはじめて、記述的認識の中にひそんでいた矛盾と一面性が対象の中に措定され、目にみえる矛盾となるからである。

ヘーゲルはこのリンネの静的体系における矛盾の客観化の問題を、種概念の論理的な本性に即して次の様に分析している。

リンネの体系においては認識の静的な区別が同時に物の静的な区別だった。「しかし、その各々が静止的に物の進行系列を記述し、独立を保つための空間〔種と種の間不連続なすき間〕をもっている永久不変な諸規定をこの様に拡大することはその本質から云ってその反対のもらへの移行であり、それらの諸規定の混乱への移行である。なぜならば形質とは、普遍的な規定性であり、規定されたものと即自的に普遍的なものと云う対立者の統一だからである<sup>15)</sup>。」

この箇所は次の様に解される。「種」と云う概念の中には差別と同一性と云う対立する契機が統一されている。もし差別が強調されるなら、ライプニッツが云った様に自然の中には全く同じ個体はないのだから、種は個体と同じ数だけあることになる。分類学はそこで形質の大きな差にもとづいて、それらをいくつかの個体群に区分するが、それによって連続的な自然の中に不連続がつくり出される。形質そのものについてみると、それはあらゆる個体において少しずつ異っている側面と共通の側面とをいつも併せもっている。

ところでリンネにおいては「種」のこの様な対立をする二側面はまだ認識されていない。あるいは彼は不連続と規定性の側面だけを強調して、本来連続であり、普遍的である自然存在をも同様に不連続で、規定されたものと考えている。それは彼が根本的に自然を静止的にとらえる記述的認識の立場に立つかぎり必然的な結果だったが、そのことによって、また記述的認

\* 多くの科学史や進化論史では、それどころか種の不変性の仮説を、最初から根拠のない、でたらめな形而上学的観念だったかの様に述べている。しかしこれは認識の弁証法的発展、逐次的な反映と云うことを忘れた誤った態度と云はねばならない。

14) E. Rádl: Geschichte der biologischen Theorien in der Neuzeit (1913) S. 264 f.

15) Phänomenologie. S. 188.

識の静的な体系が有機的自然の本性に適合しないと云うことをわれわれは自然そのものによって思い知らされるのである\*。

### c. 静止的な体系の崩壊と種の変異性の問題

リンネの静止した体系の崩壊と共に博物学の時代は終り、生物学の認識は新しい段階に高まってゆく。それはヘーゲルの時代に起った自然科学の分野における最大の革命的現象である。だがそれはどのようにして生じたのか？ヘーゲルによると、リンネが静止した不連続な種概念を自然存在の領域にまで拡大したとき、まさにこの革命の基礎がぎずかれた。そして静止的な体系からまず鉱物が、静止的な外観によるのではなく、別な原理による分類を主張して脱落する。なぜならそれらは生物とちがって相互にふれ合ったり、混ぜ合せたりすれば、急速にその外面的性質を変えてしまうからである。

生物の場合は変異はごく稀にしか観察されない。しかし観察の範囲とそれに従事する科学者の数がふえるに従って、生物の変異性に関する観察の量は増えてゆき、抗しがたい力でもって自然認識の方法を変革してゆく。

ここで注目すべきことは、生物の変異性を証言する事実は十八世紀の終りごろにはかなり多く集められていたと云う点である。生物の進化に関する完全な理論が仲々生れなかったのは、レベデフが指摘する様に生物の構造の合目的性などの様な別の事実の群があって、それらを統一する理論を見出すことが困難だったからにすぎない<sup>16)</sup>カントもまた比較解剖学や化石の問題にふれて、「自然の考古学者」にとって生物の合目的構造の問題が致命的であることを指摘している<sup>17)</sup>。

十八世紀末に生物の変異性を証明すると思われていたものは、比較解剖学からの憶測、古生物学的事実の外に、更に様々の突然変異や突然変異のため移行型の様にみえる生物があった。これらはのちに進化とは直接関係がないことが明らかにされたが、しかし、不連続で固定的な種と云うリンネの種概念を動揺させるのに最も力のあった事実だった。その異型的なものはクックのオーストラリア探検において発見されたプラチプスつまりカモノハシであろう。この動物は1799年に、ブルーメンバッハによって無歯類に分類されたが、1803年にはサンチ

\* このことから帰結することは、種は決して不変なカテゴリーではなくて、自然の発展と共に、たえず変わってゆかねばならないと云うことである。ヘーゲルは、この問題について、「大論理学」の最後のところで詳しく論じている。(vgl. Wissenschaft der Logik. hrsg. von G. Lasson Bd. II S. 462. f.) 更に、種々の問題にと分類学の方法に関しては、井尻正二「科学論」(築地書館)を参照せよ。

リンネの分類体系に関しては『エンチクロペディ』の講義の中に「リンネにおける植物の24綱の如きはいかなる自然の体系でもない」 (§ 280 Zusatz) と云う最も辛らつた批判が見出される。この問題は、「有機的なものの観察」における数と「系列」の問題と関連するので、いまここでは特に論じない。しかしこの批判をテュービンゲン時代のヘーゲルのリンネ観、とくに「植物学にはもうどんな拡張もありえない」と云う主張と比較すると彼の転向について非常に興味ある問題が生じる。(Briefe von und an Hegel. Bd. I hrsg. von J. Hoffmeister S. 468. におけるホッフマイスターの注を参照せよ。)

16) レベデフ著・渋谷寿夫訳:「ダヴィニズム I」明治図書, 00頁。

17) I. Kant, Kritik der Urteilskraft, hrsg. von K. Vorländer S. 286.

ルールが単孔目と云う新しい目を設けることを主張し、ホームはそれが哺乳類と鳥類と両棲類の中間形態であると云う仮説を唱えた\*。

これらの事実を念頭におけば、ヘーゲルが1807年に種の不変性の原理が「混乱」におけると述べていることの意味は極めて明瞭である。彼はそこでまずこうのべている。

「ところで一方の側〔認識の側〕において規定性が普遍者を打ちまかしたとしても、普遍者は他方の側〔自然の側〕において規定性を同様に支配しており、規定性を限界まで追いつめて、その区別や本質的特徴をまぜ合せてしまうのである<sup>18)</sup>。」

叙述は極度に単純化されているが、それはいかに一方でリンネの体系が明瞭な種の区別を主張しても、自然の中には様々の混合形態が生み出される可能性が残されていると云うことである。つづく箇所において、ヘーゲルがエンゲルスよりもずっと以前に、自然が移行型や実態変異種を生み出して、不連続で固定した種と云う概念を信ずる分類学者を「嘲笑する」と述べていることは注目に値しよう。

「区別されたものを整然と分離し、その区別が何かしつかりしたものだと信じていた観察は一つの原理に他の様々な原理が襲いかかり、様々な移行型や混乱した形が形成されるのを見る。……この静的な不変な存在への固執はまさに彼の最も普遍的な規定性、つまり動物や植物の本質的形質は何かと云う点において、彼がどんな規定も下しえなくなる様な様々の訴えによって嘲笑される<sup>19)</sup>。」

われわれにこの箇所において、ヘーゲルが彼の時代の自然科学的認識の発展における具体的問題について、弁証法の問題をどの様に追求したかと云う最も注目すべき例をみることが出来る。

自然を対立する二側面としてとらえない「無思想的な観察と記述」はその無思想性と一面性を自然そのものによって嘲笑される。理性はここではじめて有機的自然と云う対象の弁証法的構造を自己の意識において正しく反映しなければならないことを知る。そして自然科学の対象はもはや標本やスケッチの中に固定され、あらゆる生成を停止した自然の一時的な姿ではなく、自然が「自己の内<sup>10)</sup>で自己をとりもどす運動」そのものでなければならぬことを理解する。

「理性は持続の外観をもっていた停止した規定性から、その真相における規定性、つまり自己の反対のものへ関る姿における規定性の観察へと進まざるをえない。本質的形質と呼ばれるものは静止した規定性であって、それが単純なものとして表現され、把握されるかぎり、自

\* レヴィンゾーン著、加茂儀一他訳：「動物の社会の歴史」(理論社)(原名、Eine Geschichte der Tiene von Richard Lewinsohn.)、218頁参照。

18) ibid. S. 188.

19) ibid. S. 188. イボリットは前記の注釈書において、この「混合」をの意味を誤ってとらえている。彼はこの箇所についてこうのべている。「動物の領域はある次元で混合する。そして理性の区別をもはや表現しない。生物学はヘーゲルにとって、存在の進化の科学ではない云々…」op. cit. p. 229. イボリットのこの誤ちは、前述の様に、彼がこの箇所を、ラッソンの自然哲学的区分にしたがってとらえ、歴史的にとらえることを忘れていた点にある。

己の内で自己をとりもどす運動の消滅するモメントだと云うその本性を現していない。いまや理性の本能は規定性をその本性にしたがって、つまり独立に存在するのではなくて対立するものに移行すると云う本性において把握しようとする……<sup>20)</sup>」

科学者の本能はこの認識の新しい段階において、生物を生きた流動的な過程としてとらえることとこの過程の本質と法則の認識とに向ってゆく。けれども意識はまだこの対象の本性を自己の内に反映させる思惟の形式をほとんどもっていない。

このことから「自然の観察」の後半部におけるヘーゲルの課題が何であるか推測されよう。彼はそこで同時代の色々な生物学的法則——実は法則と称するもの——を詳細に分析してその取ってつけた様な思惟の態度を非難しているが、同時にそれは意識が生きた自然と云う対象の本性を反映するにふさわしい形式を発見する過程である。私はヘーゲルの弁証法と彼が論理学及び自然哲学で詳細化したその諸形式をこの様な見地においてとらえたいと思う。「自然は歴史をもたない」と云うヘーゲルのテーゼもこの観点から考察すれば一概に非科学的な結論だったと云うことはできない。むしろそれは生物における目的論や、一様な発展と進歩と云う考えの擬科学性をつく非常に正しい主張を含んでいたと考えられる。この問題は本稿の続篇においてもっと詳しく検討する予定である。

(未完)

20) *ibid.* S. 189.